

2024

教員採用試験

教職教養

教育心理

テキスト

コントロールタワー

講義回	学習内容		テキスト			トレーニング
	テーマ	内容	章	節	対応ページ	対応問題
第 1 回	教育心理学の概要	教育心理学とは	第 1 章	1	P.1	問題 1～5
		心理学の歴史と主な人物		2	P.3	
第 2 回	発達	発達とは何か	第 2 章	1	P.7	問題 6～21
		発達の段階と発達課題		2	P.13	
		発達の諸理論		3	P.23	
第 3 回	学習	基本的な学習理論	第 3 章	1	P.34	問題 22～38
		動機づけ		2	P.47	
		記憶と忘却		3	P.56	
		学習の転移		4	P.62	
第 4 回	人格と適応	人格の理論	第 4 章	1	P.70	問題 39～51
		適応		2	P.85	
第 5 回	その他の心理領域	適応における困難	第 5 章	1	P.97	問題 52～65
		カウンセリング・教育相談		2	P.103	
		その他の心理療法		3	P.111	
第 6 回	教育評価	評価の基本理論	第 6 章	1	P.122	問題 66～76
		知能検査		2	P.127	
	学級集団	学級経営と集団機能	第 7 章	1	P.134	問題 77～82
		学級集団の理解と測定		2	P.139	

教職教養 過去3年分の出題傾向表1 2020年～2022年実施試験

科目	分野	北海道・札幌市			青森県			岩手県			秋田県			宮城県・仙台市			山形県			福島県			栃木県			群馬県		
		2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020
教育原理	教育論			○	○	○			○	○	○			○		○	○	○		○	○	○			○	○	○	
	教育課程論				○																							
	学習指導要領	○	○	○	○	○	○		○	○	○			○		○		○	○	○		○			○	○	○	
	道德教育		○											○		○		○	○								○	
	特別活動・総合学習	○								○	○					○	○					○						
	生徒指導	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	特別支援教育	○	○						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
	人権教育	○	○											○													○	○
	キャリア教育・情報教育		○		○				○		○			○	○										○	○	○	○
	社会教育・生涯学習																											
	その他													○														○
教育法規	教育の基本				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	管理運営							○	○			○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	児童生徒			○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		○		○	○	
	教職員		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	特別支援教育									○	○																	
	学校保健・安全	○			○				○		○		○	○	○		○							○	○	○	○	
	教育行政																○											
	社会教育																											
	その他																○										○	
教育心理	発達	○	○		○			○		○		○	○	○										○	○	○	○	
	学習				○	○	○			○	○	○			○									○		○	○	
	人格・適応		○					○		○	○		○		○									○	○	○	○	
	その他の心理領域				○			○					○											○	○	○	○	
	教育評価				○			○		○		○												○	○	○	○	
	学級集団				○																							
教育史	西洋教育史			○	○	○	○		○		○	○	○			○	○					○	○	○				
	日本教育史		○		○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○					○	○					
教育時事		○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

※TACの講義やテキストでの取扱い論点に照らして「○（出題あり）」をつけています。受講の際に参考になさってください（他社の参考書等とは各テーマの取扱い論点異なる場合がございます）。

教職教養 過去3年分の出題傾向表2 2020年～2022年実施試験

科目	分野	茨城県			埼玉県・さいたま市			千葉県・千葉市			東京都			川崎市・相模原市			神奈川県・横浜市			新潟県・新潟市			富山県			石川県			福井県		
		2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020			
教育原理	教育論				○						○	○	○		○	○															
	教育課程論																									○					
	学習指導要領				○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					○										
	道德教育								○		○		○		○						○										
	特別活動・総合学習										○	○	○																		
	生徒指導		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	特別支援教育	○			○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○				○		○		
	人権教育				○						○	○	○								○								○		
	キャリア教育・情報教育	○	○		○					○	○										○								○		
	社会教育・生涯学習																				○										
その他																				○											
教育法規	教育の基本	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	管理運営	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○			○				○		○	○			○	○	○	○			
	児童生徒	○	○	○	○		○	○	○	○	○				○					○		○					○				
	教職員	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○					○		○	○			○	○	○	○			
	特別支援教育	○		○	○		○		○					○						○					○	○		○			
	学校保健・安全	○	○	○	○	○			○					○						○	○			○				○			
	教育行政		○				○				○	○																			
	社会教育																														
その他																															
教育心理	発達					○				○	○			○	○	○				○								○	○		
	学習									○	○	○	○		○							○	○					○			
	人格・適応										○										○										
	その他の心理領域											○	○									○					○	○			
	教育評価				○		○	○			○	○	○								○				○	○	○	○	○		
学級集団										○	○									○				○							
教育史	西洋教育史				○		○			○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	日本教育史					○				○	○										○										
教育時事		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		

※TACの講義やテキストでの取扱い論点に照らして「○（出題あり）」をつけています。受講の際に参考になさってください（他社の参考書等とは各テーマの取扱い論点が異なる場合がございます）。

教職教養 過去3年分の出題傾向表3 2020年～2022年実施試験

科目	分野	山梨県			長野県			岐阜県			静岡県・静岡市・浜松市			愛知県			名古屋市			三重県			滋賀県			京都府					
		2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020			
教育原理	教育論	○	○	○							○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	教育課程論																														
	学習指導要領	○	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	道德教育		○			○																							○	○	
	特別活動・総合学習	○		○		○								○																	
	生徒指導	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	特別支援教育											○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	人権教育					○	○	○	○		○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○		
	キャリア教育・情報教育					○	○				○		○					○						○					○		○
	社会教育・生涯学習																														
その他																															
教育法規	教育の基本	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○				○	○	○	○	○	○	○			○		
	管理運営	○	○		○	○	○	○	○				○									○				○	○		○	○	
	児童生徒	○	○	○	○	○								○			○	○	○				○	○	○				○		○
	教職員	○	○	○	○	○		○	○		○	○				○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	特別支援教育					○								○	○				○										○	○	
	学校保健・安全	○	○	○	○	○	○	○	○				○						○	○			○	○	○						
	教育行政																														
	社会教育			○																											
その他			○				○	○																				○		○	
教育心理	発達	○	○					○	○		○									○			○	○	○	○	○	○	○	○	○
	学習			○		○	○	○	○					○						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	人格・適応					○	○	○	○				○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	その他の心理領域					○					○					○								○							
	教育評価																							○							
教育史	西洋教育史	○	○	○							○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	日本教育史	○	○	○										○	○	○				○											
教育時事		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

※TACの講義やテキストでの取扱い論点に照らして「○（出題あり）」をつけています。受講の際に参考になさってください（他社の参考書等とは各テーマの取扱い論点異なる場合がございます）。

教職教養 過去3年分の出題傾向表4 2020年～2022年実施試験

科目	分野	京都市			大阪府・大阪市・堺市・豊能地区			兵庫県			神戸市			大和高田市・奈良県			和歌山県			鳥取県			島根県			岡山県					
		2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020			
教育原理	教育論	○			○			○			○			○	○	○	○				○			○			○				
	教育課程論														○																
	学習指導要領	○			○	○	○			○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	道德教育														○	○	○														
	特別活動・総合学習																				○	○									
	生徒指導	○			○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	特別支援教育	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	
	人権教育	○			○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○			○	○	○	○	
	キャリア教育・情報教育				○	○		○	○			○			○	○								○	○		○	○			
	社会教育・生涯学習																														
その他																															
教育法規	教育の基本				○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○				
	管理運営				○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○			
	児童生徒				○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○								
	教職員				○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	特別支援教育				○	○	○	○	○		○	○																			
	学校保健・安全	○			○	○	○	○	○		○			○	○	○							○			○	○				
	教育行政																					○									
	社会教育																														
その他	○				○									○	○									○							
教育心理	発達									○			○	○	○	○	○							○			○				
	学習				○	○					○		○	○	○	○	○	○									○	○			
	人格・適応						○	○		○			○	○													○				
	その他の心理領域	○									○			○	○												○	○			
	教育評価																									○	○				
学級集団																															
教育史	西洋教育史	○				○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○								○			
	日本教育史				○	○							○	○	○	○	○	○	○	○							○				
教育時事		○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

※TACの講義やテキストでの取扱い論点に照らして「○（出題あり）」をつけています。受講の際に参考になさってください（他社の参考書等とは各テーマの取扱い論点が異なる場合がございます）。

教職教養 過去3年分の出題傾向表5 2020年～2022年実施試験

科目	分野	岡山市			広島県・広島市			山口県			徳島県			香川県			愛媛県			高知県			福岡県・福岡市・北九州市			佐賀県		
		2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020			
教育原理	教育論																											
	教育課程論																											
	学習指導要領	○	○		○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○			
	道徳教育																						○	○	○			
	特別活動・総合学習			○							○		○		○			○					○	○	○			
	生徒指導	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○			○	○	○	○	○	
	特別支援教育	○		○	○	○		○	○		○		○		○		○							○		○	○	
	人権教育	○	○	○	○			○	○	○							○	○	○	○			○	○	○		○	
	キャリア教育・情報教育	○	○					○			○		○				○	○	○	○			○	○	○	○	○	
	社会教育・生涯学習																											
その他																							○					
教育法規	教育の基本			○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○		
	管理運営					○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○					○	○	○	
	児童生徒				○	○		○	○	○	○												○	○	○	○	○	
	教職員		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	
	特別支援教育		○			○				○	○			○											○			
	学校保健・安全	○	○		○	○		○	○	○	○			○				○					○	○	○	○	○	
	教育行政							○																				
	社会教育								○																			
その他					○										○							○	○			○		
教育心理	発達							○	○	○	○	○										○	○	○	○	○		
	学習							○		○	○	○				○						○	○			○		
	人格・適応							○						○											○			
	その他の心理領域							○	○					○									○					
	教育評価								○			○													○	○	○	
教育史	学級集団																									○		
	西洋教育史							○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○					○	○	○	
	日本教育史							○									○	○	○	○						○		
	教育時事	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	

※TACの講義やテキストでの取扱い論点に照らして「○（出題あり）」をつけています。受講の際に参考になさってください（他社の参考書等とは各テーマの取扱い論点異なる場合がございます）。

教職教養 過去3年分の出題傾向表6 2020年～2022年実施試験

科目	分野	長崎県			熊本県			熊本市			大分県			宮崎県			鹿児島県			沖縄県		
		2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020	2022	2021	2020
教育原理	教育論	○	○	○							○			○	○			○		○	○	○
	教育課程論				○							○					○					
	学習指導要領	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
	道德教育		○								○	○		○							○	
	特別活動・総合学習											○	○	○	○	○					○	
	生徒指導	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
	特別支援教育	○			○	○		○		○	○			○	○	○	○	○	○			
	人権教育	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○			○	○	○			
	キャリア教育・情報教育	○	○	○					○			○			○					○		
	社会教育・生涯学習																					
その他															○							
教育法規	教育の基本	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
	管理運営	○		○	○	○		○	○		○	○	○	○	○						○	
	児童生徒		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	
	教職員	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	特別支援教育		○		○	○	○	○			○	○		○	○		○	○		○	○	○
	学校保健・安全	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○
	教育行政					○			○	○	○	○	○								○	
	社会教育																					
その他			○	○			○			○	○		○							○		
教育心理	発達	○		○	○	○	○		○		○	○	○	○			○	○		○	○	
	学習		○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○			○		○
	人格・適応	○	○			○	○	○			○	○		○	○						○	○
	その他の心理領域	○			○	○					○	○		○			○				○	
	教育評価		○			○			○		○	○	○		○			○				○
	学級集団		○																			
教育史	西洋教育史	○	○	○							○	○		○	○			○		○	○	○
	日本教育史	○	○	○				○			○	○		○	○		○	○		○	○	○
教育時事		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

※TACの講義やテキストでの取扱い論点に照らして「○（出題あり）」をつけています。受講の際に参考になさってください（他社の参考書等とは各テーマの取扱い論点異なる場合がございます）。

本書の特長と使い方

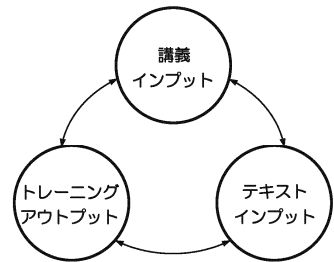
本書は教員採用試験合格のための専用テキストであり、次のような方針で作成されている。

1. 本書の構成

このテキストは、本書一冊で初めて学習する人でも、無理なく合格に必要な知識を身に付けられるよう、本試験における重要論点をわかりやすくまとめている。また講義とトレーニング（問題集）に沿った構成となっており、関連する事柄はコントロールタワーで確認できる。

2. 本書の使用法

講義はコントロールタワーの進度に従い、このテキストに沿って進行する。講義では全体像の把握と重要論点を理解するための解説に重点が置かれるので、必要に応じてテキストの細かな情報にも目を通してほしい。また、学習した内容が本試験でどのように問われているのかを、トレーニング（問題集）の該当問題を解いて必ず確認すること。



3. 本書の表記

(1) 「重要キーワード 暗記&checkシート」について

章の最後には、重要ワードのチェックリストを収載している。暗記ペンなどを使用して復習し、記憶の定着がされているか、定期的にチェックしよう。

(2) 「学習指導要領」について

本書中の「学習指導要領」は、特に記載がある場合を除いて、2017（平成29）年、2018（平成30）年公示版学習指導要領のことを示す。

教育心理学の概要

第1節 教育心理学とは

1. 教育心理学の定義

教育心理学とは、教育に関連する諸事象を心理学的に研究し、教育効果を高めるのに役立つ知見と技術を学ぶ学問である。教育心理学はよりよい教育実践を可能にするため、次のような役割を担う。

- ・子どもの行動、発達、学習などを研究し、明らかになった原理や法則から、教育課程に関する正しい知識と理論を構築していく
- ・構築された理論や知識を、教育活動に応用していく

2. 教育心理学の領域

教育心理学は、主に以下の領域において活用していくことが望まれる。

発達	<p>子どもの心身の発達について深く理解する。教育とは教育基本法にも定められているように、人間の「人格の完成」※1をめざす営みである。人格とは肉体及び精神すべてにおける人間の主体そのものであり、教師は子どもの心身の発達を促し、成熟へと導いていく役割を担う。</p> <p>人間の発達について理解することは、児童・生徒理解に基づいた教育指導を実現するために不可欠である。</p>
学習	<p>学習が成立する要件やメカニズムを理解することで、適切な教育課程の編成及び教育指導に役立てていく。</p> <p>学習とは人間が新たな知見を習得する行為であるが、その成立過程にはさまざまな要因が影響を及ぼす。たとえば学習者の知能や性質、経験、環境、他者による働きかけ、学習内容とその順番などがある。</p> <p>学習の成立要件とその過程を深く理解することにより、適切</p>

※1
第1条(2006年公布)

	な環境及び指導方法を模索していくことができるようになる。
人格 適応	人間にはそれぞれ性格や気質において個人差があり、多様な人格を有する個人が集団となって社会生活を営む。人間の人格と適応のあり方について深く理解することで、子どもの人格形成を促し豊かな学校生活と自己実現を助長するための方策を探っていく。
評価	教育活動とは、事前に作成した教育計画に基づき実施されるものである。そのため教師は、教育計画と教育の実施過程が適切であるかを測定し、その結果を次の教育計画の改善に役立てていく必要がある。 測定と評価についての理論と方法を理解することにより、適切な教育評価の実現を目指すことが大切となる。

第2節 心理学の歴史と主な人物

1. 心理学の歴史的発展

1860年頃、フェヒナー^{※1}が、刺激と感覚の物理的関係を明らかにする精神物理学の研究をはじめた。こうした大脳生理学の進歩に伴い、心理学は徐々に自然科学としての性格を帯びてくることとなった。

<p>構成心理学 (実験心理学)</p>	<p>「心の科学」としての心理学を創始したのは、ヴント^{※2}である。彼は人間の意識に着目し、自分で自己の意識を観察する内観法という方法を用いて、意識の分析を試みた。そしてさまざまな心的要素が結合する法則を明らかにすることで、認識の成立過程を探ろうとした。</p> <p>ヴントは意識の構成要素を純粹感覚と単純感情であるにとらえ、それらの要素がどのように組み合わせられているかを解明することで、人間の認識過程が明らかにできると考えた^{※3}。こうした要素の構成のあり方を問題とするヴントの心理学は、構成心理学と呼ばれる。</p>
<p>行動主義の心理学</p>	<p>ヴントの着目した意識は、外部からの観察ができない主観的な現象である。このためアメリカの心理学者ワトソン^{※4}は、心理学を「意識ではなく行動を扱う学問である」と定義し、意識を研究対象とするヴントの心理学を批判した。そして研究対象として行動に着目し、客観的な観察を通じて行動の法則性を明らかにしようと試みる。</p> <p>ワトソンはパブロフ^{※5}の条件反射説やジェームズ^{※6}の機能主義心理学（機能心理学）に影響を受けており、生体に外から与えられた刺激とそれに対する生体の反応との関係を明らかにすることで、人間の行動の法則性が解明できると考えた。</p> <p>つまり人間が特定の刺激を受けると、ある法則に基づき特定の反応がなされ、それが目に見える行動として現れると考えた。そしてその法則を明らかにすることで、人間の心理を深く理解できると主張した。こうした行動主義の考え方は、後にスキナー^{※7}やハル^{※8}、トールマ</p>

※1
(Gustav Theodor Fechner: 1801-1887)

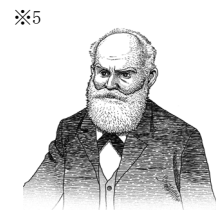


※2
(Wundt, W.: 1832-1920)

※3
物質が小さい単位の原子の集合体で出来ているように、人の心もたくさんの要素の集合体のようなものだという考え方。



※4
(Watson, J. B.: 1878-1958)



※5
(Pavlov, I. P.: 1849-1936)

※6
(James, W.: 1842-1910)

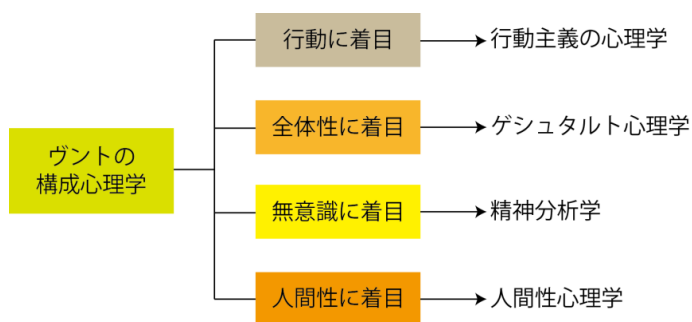
※7
(Skinner, B. F.: 1904-90)

※8
(Hull, C. L.: 1884-1952)

	<p>ン※9らの新行動主義に受け継がれていく。</p> <p>主に北アメリカで発展した行動主義の考え方は、現在にも続く方法論的行動主義にも大きな影響を与え、今でも多くの実験心理学者が採用している。</p>	<p>※9 (Edward Chase Tolman:1886-1959)</p>
<p>ゲシュタルト心理学</p>	<p>北アメリカでワトソンの提唱した行動主義が盛り上がりを見せてきた頃、ドイツではヴェルトハイマー※10、ケーラー※11、コフカ※12らが台頭してきた。</p> <p>ヴェルトハイマーらは、人間の心理現象における全体的なまとまりが重要であると考え、人間の心を単なる要素の集合体とは見なせず、心的現象そのものを一つのまとまりとしてとらえていくことが重要だということで、ヴェントの構成心理学を批判した。</p> <p>こうした認知のまとまりに着目した心理学は、ゲシュタルト心理学と呼ばれる。</p> <p>ゲシュタルト心理学はレヴィン※13により社会心理学に応用されることとなる。レヴィンはリーダーシップを専制型、民主型、放任型に分類し、集団に及ぼす影響力について研究した。このような集団における心理学の理論は、主に教師による学級経営などに役立てられている。</p>	<p>※10 (Wertheimer, M. :1880-1943)</p> <p>※11 (Köhler, W. :1887-1967)</p> <p>※12 (Koffka, K. :1886-1941)</p> <p>※13 (Kurt Lewin:1890-1947)後に「社会心理学の父」と呼ばれた。</p>
<p>精神分析学</p>	<p>フロイト※14は、意識ではなく無意識を研究対象とした精神分析学を提唱した。彼は人間の精神活動において無意識が大きな役割を果たすと考え、人間の行動は自ら意識できない深層心理に蓄積された衝動(リビドー)に支配されていると考えた。</p> <p>フロイトは自身のもとに運び込まれた患者の不適応状態※15を、自由連想法や夢分析などの手法を用い、患者の無意識下に抑圧された幼児期の苦い経験や不安・恐怖などを意識の中に取り出すというような治療を行った。また年齢に応じてリビドーが向かう方向は変化すると考え、幼少期の欲求が向かう方向性を段階的に区分した発達理論を唱えた。</p> <p>フロイトの唱える人格理論や無意識の世界に関する考察は、その後の心理学にも大きく影響し、さまざまな学</p>	<p>※14 (Freud, S. :1856-1939)</p> <p>※15 心理的な不安定さのこと。</p>

	派を生み出した。なかでも個人心理学のアドラー※16や、分析心理学※17のユングが有名である。
人間性心理学 (現象学的心理学)	<p>ディルタイ※18やシュプランガー※19は、実験中心の心理学では人間を断片化しすぎており、生きている人間の精神活動をありのまま追体験することが重要であると主張し、実験室での再現や可視化ができない愛情や想像力など、人間らしい不確定な現象をありのままに受け入れるべきと考えた。これを了解心理学という。</p> <p>この了解心理学の考え方は、後に実存主義心理学の فرانクル※20や、人間主義心理学のマズロー※21、ロジャーズ※22にも影響を与える。</p> <p>マズローは欲求の階層説を唱え、生理的欲求が満たされることで、承認欲求などの、より社会的な第二次欲求があらわれると唱えた。彼は自己実現という概念に注目し、人間らしい欲求の充足に焦点をあてる人間主義心理学を創始した。</p> <p>またアメリカの臨床心理学者であるロジャーズは、人間と状況とのかかわりを重視し、自由・責任・愛情・自己実現など肯定的で人間特有の現象を重視すべきだという人間性心理学を提唱した。そしてクライアント（来談者）をありのまま受容し、共感することを軸とした非指示的カウンセリングの手法を考案する。</p>

- ※16
(Alfred Adler :1870-1937)
アドラー心理学ともいう。アドラーは、人を動かすのはリビドーではなく、劣等感を補償して力を得ようとする欲求だとした（優越欲求）。
- ※17
(C. G. Jung:1875-1961)
ユング心理学ともいう。
- ※18
(Dilthey, W. :1833-1911)
- ※19
(Spranger, E. :1882-1963)
- ※20
(Frankl, V. :1905-97)
- ※21
(Maslow, A. H. :1908-70)
- ※22
(Rogers, C. R. :1902-87)



重要キーワード 暗記 & checkシート

第1章 教育心理学の概要

■教育心理学とは

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの行動、発達、学習などを研究し、明らかになった原理や法則から、教育課程に関する正しい知識と理論を構築していく。 ・構築された理論や知識を、教育活動に応用していく。 |
|--|

■教育心理学の領域

発達	子どもの心身の発達について、深く理解する。
学習	学習が成立する要件やメカニズムを理解することで、適切な教育課程の編成及び教育指導に役立てていく。
適応	人間の人格と環境への適応について理解することで、教育現場のみならず社会生活全般への適応を促し、子どもたちの自己実現を支援する。
評価	測定と評価についての理論と方法を理解し、適切な教育評価の実現を目指す。

■心理学の歴史と主な人物

構成心理学	ヴェント	・内観法
行動主義心理学	ワトソン	・行動観察、分析 ・法則性
ゲシュタルト心理学	ヴェルトハイマー	・認知のまとまり
社会心理学	レヴィン	・場の理論 ・リーダー論
精神分析学	フロイト	・無意識 ・衝撃（リビドー）
人間性心理学	マズロー	・欲求階層説 ・自己実現

発達

第1節 発達とは何か

1. 発達の原理

(1) 発達の定義

発達という言葉から、子どもが成人になるまで、心身が強くなり大きくなっていく様をイメージしがちであるが、必ずしもそれだけが発達ではない。

アメリカの発達心理学者であるエリクソン^{※1}は、ライフサイクルという概念を用い、人間が生まれてから死ぬまでの変化を発達段階として示した。

発達とは連続的な変化の過程であり、そこには一定の順序がある^{※2}。外見的には突然出現したように思える現象であっても、継続的な観察をしていると、その変化に通じる何らかの予兆を見つけることができる。よって個々の現象を時間的な関連においてとらえることが、発達を理解する上で重要となる。

(2) 発達初期の経験と学習

「三つ子の魂百まで」ということわざがあるが、これは「小さいときに獲得したことは一生変わらない」という意味で使われている。このことわざが示す通り、心理学的には初期経験や初期学習は非常に重要なものとなる。

ローレンツ^{※3}は、生まれたばかりのハイイロガンの雛たちに対し、人間が親鳥のマネをすることによって、母親に成り代わることができるという現象を発見した。この現象を刻印づけ^{※4}という。

学習には、出生直後のある一定の短い期間に限られて成立し、一度成立すると極めて安定的に、後の行動に影響を与えるものがある。動物においても、人間においても、初期学習・初期経験のもつ重要性は大きい。

(3) 身体の発達：運動と器官

人間の運動機能を司る脳の運動野は2歳で完成する。誕生からの2年間は、

※1
(E. H. Erikson: 1902-94)

※2
発達の序列の原理という。

※3
(K. Z. Lorenz: 1903-1989)

※4
インプリンティング、刷り込みともいう。

首を自律的に支えることができない身体から、階段を上り下りできるまでの身体に成長し、生涯で最も著しい発達を遂げる時期である。

運動を統制する神経系や筋肉の発達には順序があり、頭部から足へ、また肩から指先へとといった身体の中部から末端へと、可動域が拡大していく。心臓や脳、呼吸器などの器官や機能は、その発育過程にそれぞれ違いがある。スキヤモン^{※5}は、器官の発達を4つのパターンに分けた発達・発育曲線を提唱した。

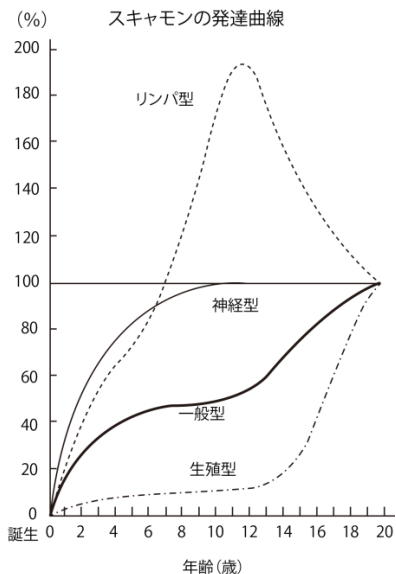
神経型	脳、脊髄、視覚器、頭径のこと。神経系は、リズム感や体を動かすことの器用さを担う。出産直後から急激に発達し、4、5歳で成人の約80%に達する。
リンパ型	胸腫、リンパ節、同質性リンパ組織のこと。免疫力を向上させる扁桃やリンパ節等のリンパ組織の発達を指す。 生後～12歳頃までにかけて急激に成長し、大人のレベルを超えるが、思春期を過ぎた頃から大人のレベルに戻る。
一般型	呼吸器、消化器、腎臓、心大動脈、脾臓、筋全体、骨全体、血液量のこと。一般型は身長・体重や肝臓、腎臓等の胸腹部臓器の発育を示す。 生後から幼時期までに急速に発達するが、その後は次第に緩やかになり、第二性徴が現れる思春期になると再び急激に発達し大人のレベルに達する。
生殖器型	睾丸、卵巣、副睾丸、子宮、前立腺のこと。 児童期前半までは僅かに成長するが、14歳あたりから急激に発達する。生殖器系の発達に伴い男性ホルモンや女性ホルモン等の性ホルモンの分泌も多くなる。

※5

(Scammon, R. Everingham:
1883-1952)
アメリカの医学者

【スキヤモンの発達曲線】

脳は出生直後から急速に発達し、学童期の脳容量は成人の水準に近くなる(神経型)。これに対し、身体の発達は乳幼児期と学童期に成長促進が見られ(一般型)、二次性徴は学童期に成長促進をし(生殖器型)、免疫機能は学童期にピークを示す(リンパ型)。



(4) 精神の発達、認知

幼児が外界を認知する場合、大人のように物事を客観的にとらえるのではなく情緒的・要求的にとらえようとする。ウェルナー^{※6}はこの主観と客観が未分化な認知的特徴を相貌的知覚^{※7}と呼び、発達とは未分化な全体的反応が特殊的・分節的な反応に分化し、同時に新しいより複雑な体制へと統合されるところにあると唱えた。

知的な活動の発達は、大きく2つの次元でとらえることができる。

- ・一般知能、あるいは頭の良さという次元
- ・内容領域ごとの発達という次元

知的な活動において、経験した内容はそれぞれ領域ごとに分かれて獲得される。

脳のレベルでいえば、ピンカー^{※8}の提唱した、モジュールと呼ばれる知能内容ごとに分かれて知的な処理を行う部分が存在する。例えば数のモジュールは、外界の対象を「数」という面からとらえて処理するため、林檎とボールという異なる物質があっても、「どちらも3個ある」というように個数での把握ができる。もし数のモジュールが存在しなかったら、個数という観点から対象をとらえることができず、数による分類や序列付けをすることができない。

数のモジュールなどは、生後半年を過ぎた頃に獲得されるといわれている。しかしそのモジュールを用いて、お釣りの計算をしたり、2次関数や微分積分の問題を解くためには、そうした数的処理を行うための知識や方法

※6
(Werner, H. :1890-1964)

※7
「そうぼうてき」。人間の表情などだけで外界の状況を把握しようとすること。

※8
(Steven, A. Pinker :1954-)

を獲得するための学習^{※9}が必要となる。あくまでモジュールはものごとを処理するための精神能力であり、それが処理スキルの獲得に直結するものではない。

人の認知を理解する上でもうひとつ基本となるのが、ピアジェ^{※10}の提唱した**シエマ**という概念がある。ピアジェは、環境による学習が認知の発達に及ぼす影響について着目し、人間が物事を認知する際の基本的な枠組みが存在すると考えた。そして子どもは既に持っている知識・能力を使って外界に働きかけ、知識や枠組みを変化させることで知的発達をしているのだと唱えている。

シエマとモジュールは類似した概念であるといえるが、モジュールがより生得的で生理学的な概念であるのに対し、シエマはより環境との関わりや学習プロセスでの発展に焦点をあてた、道具的な概念であるといえる。

※9
教科でいえば算数や数学

※10
(Jean Piaget:1896-1980)
スイスの心理学者

2. 発達をめぐる論争① 《発達の主体は何か》

発達とは、人間の変化について表した概念である。では人間の発達を理解するためには、「何の」変化に焦点をあてるべきだろうか。ここでは**ピアジェ**と**ワロン**^{※1}の論争をとりあげる。

ピアジェとワロンは、人間観の違いから、人間存在の主体をとらえる視座が異なっていた。

ピアジェは周囲の人々との関係性から切り離れた生物学的な「**固体**」として人間をとらえ、「**知能の構造**」から発達をとらえた。また人間という主体を理解する上で、知能を特別な領域であると位置づけ、認知の変化に焦点をあてることで発達を説明し、質問と診断を軸とした臨床的研究の手法を確立、及び子どもの言語、数や量の概念などの研究を展開していった。

これに対しワロンは、「**パーソナリティ全体**」から発達をとらえ、個人を他者と切り離すことのできない存在として考えた。〈身体—自我—社会性〉を一体的に内包するパーソナリティに着目し、その全体的な変化をとらえることで、人間の発達を理解しようとした。

※1
(Henri Wallon
:1879-1962)
フランスの精神科医、心理学者、教育者

3. 発達をめぐる論争② 《発達の要因は何か》

人間は生物学的に、両親から受け継いだ遺伝子(DNA)に組み込まれた遺伝情報によって生物としての形質が決まっていく。しかしルソー^{※1}が「人間は教育によってつくられる」と述べたように、教育を含めた環境要因も心身の形成に大きな影響を及ぼす。

<p>孤立要因説</p>	<p>遺伝か環境か、いずれか一方の要因によって発達が規定されるとする立場である。生まれながらに持つ遺伝的要因を重視する考え方を生得説※2という。</p> <p>発達心理学者のゲゼル※3は、遺伝的要因を重視する成熟優位説を主張し、双生児統制法を用いて、生後46週の一卵性双生児を対象にした実験を行った。</p> <p>この実験では、双子の1人には早いうちから階段を上がる練習をさせておき、もう1人は少し遅らせて練習を始めさせる。すると先に始めた子どもより、あとから始めた子どものほうが階段上りをマスターするのが早かった。</p> <p>この結果から、学習が効果的に修得されるためには、レディネス※4の成立が不可欠であると考えた。双子の実験では、先に練習をはじめた子どもには、まだ階段を上るために必要なレディネス※5が備わっていなかったということになる。したがって何かの学習を行うときは、その獲得に必要なレディネスの有無について見極める必要がある。</p> <p>ウィリアム・ジェームズ※6は人間の行動を本能という概念で説明した。ピンカー※7は人間には生まれつき認知モジュール※8が備わっており、それによって特定のスキルを習得する学習が可能になると主張した。</p> <p>またチョムスキー※9は言語の獲得過程において、子どもが生まれながらにもつ言語の受け入れ能力が十分でないと学習が成立しないと唱えた。</p> <p>対して成長過程での経験が発達に大きく影響するという考え方は、後天説または経験説と呼ばれる。行動主義心理学者のワトソンは、主として環境を通しての学習が発達を規定するのだとして環境優位説を唱えた。</p>
<p>輻輳説※10</p>	<p>1914年、「遺伝も環境も」関係するという輻輳説を提唱したシュテルン※11は、「発達を規定するのは遺伝か環境か※12」という論争に新たな答えをもたらした。</p> <p>彼は個性や知性に関する研究の先駆者であり、IQとい</p>

※1



(Jean J. Rousseau :1712-1778)
フランスの教育哲学者

※2
生得「論」ともいう。

※3
(Arnold L. Gesell :1880-1961)
アマラとカマラの分析記録で知られる。

※4
学習の準備性

※5
この場合は身体的発達基礎を示す。

※6
(W. James:1842-1910)

※7
(Steven A. Pinker :1954-)

※8
遺伝的な精神能力のこと。

※9
(Noam Chomsky:1928-)

※10
「ふくそうせつ」

※11
(William L. Stern :1871-1938)
ドイツの心理学者、哲学者

※12
nature or nurture ?

	<p>う概念を創始した人物である。輻輳とは、いくつかのものが加算されるという意味だが、シュテルンは遺伝的要因と環境要因の両方がそれぞれ加算される形で、発達に影響を及ぼすのだと考えた。</p> <p>また、ルクセンブルガーは、シュテルンの輻輳説を対極説として図式化した。</p>
<p>相互作用説</p>	<p>シュテルンの輻輳説を発展させる形で、遺伝と環境との相互作用に着目する説がでてきた。これは遺伝と環境とがそれぞれ加算されるのではなく、相乗的に作用しあいながら発達を決めていくという考え方である。</p> <p>主な学説には、ジェンセン※13の唱えた環境閾値説※14がある。環境閾値説は、形質の発現に必要な環境要因の量や質は、それぞれの形質に固有のものであり、一定水準をもっているという考え方である。</p> <p>つまり遺伝的な素質・可能性と環境条件の双方が重要であり、どちらか一方が整っているだけでは形質の発現を促すことができないとしている。</p> <p>【ジェンセンの環境閾値説】</p> <p><特性の種類と必要な刺激量（閾値）>※15</p>

※13
(Jensen, A. R. :1923-)
※14
「かんきょういきちせつ」

※15
特性A：身長など。環境の影響は弱く、必要とされる環境の量はわずか。
特性B：知能検査の成績など。
特性C：学業成績など。
特性D：絶対音感など。かなり豊かな環境が必要とされる。

第2節 発達の段階と発達課題

1. 発達の段階説

乳児が急に成人になることは無いように、発達には一定の順序と方向性がある。一般的に発達の段階は乳児期、幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期という6つの区分に分けて考えられる。こうした考え方を**発達の段階説**という。

各発達段階にはそれぞれ心身の変化に応じた特徴がある。例えば幼児期にあたる2歳前後では、基本的な運動機能が備わるとともに言語の獲得がなされる。また児童期にあたる7歳前後では数量の概念を理解する、などである。

また各段階には乗り越えるべき発達課題が設定されている。**ハヴィガースト**^{※1}や**エリクソン**^{※2}は、各段階に固有の発達課題を克服することで、次の発達段階へと進むことができるとして、その重要性を主張した。

たとえばモラトリアムを特徴とする青年期では、身体的変化の受容や社会的独立がその課題となる。仮にその時期に課題を克服するために必要な技能を獲得しておらず、未消化の課題を抱えたまま次の発達段階に進んでしまうと、その後の発達に支障をもたらす可能性も指摘されている。

※1
(Robert J. Havighurst
:1900-1991)

※2
(Erik H. Erikson
:1902-1994)

2. 一般的な発達段階

(1) 乳児期

生後2歳頃までを**乳児期**と呼ぶ。人間は2歳くらいで脳の運動野^{※1}が完成し、この2年間で肉体、運動機能、言語などの面で最もめざましく発達する。

出産直後に自立歩行するような他のほ乳類動物と異なり、人間の赤ん坊は未熟児の状態で生まれてくるため、大人の手厚い保護がなければ生存できない。そのため生後2~3ヶ月の乳児には、生存に有利と思われる原始反射が見られる。主な原始反射には、赤ん坊の手の平に大人の指などを入れるとギュッと握る**把握反射**、口元に小指や乳首などを持っていくと、ちゅぱちゅぱと吸いつく**吸啜反射**、音の刺激などで上肢を大きく開き、抱き付こうとする**モロー反射**などがある。

生後2~3ヶ月になると、「アー」「ウー」といった母音だけの**クーイング**という音声を発し、その後**喃語**^{※2}と呼ばれる発語をするようになり、養育者との原初的会話が見られる。

また、認知の発達とともに、社会性の片鱗もこの頃から見ることができ

※1
運動機能をつかさどる部位

※2
「なんご」。
「バブバブ」「ダダババ」などの母音以外を使う発語のこと。

る。生後3ヶ月頃になると、養育者と目を合わせて微笑む社会的微笑が見られる。乳児の笑顔は、養育者に喜びを与え、乳児を愛護しようという気持ちが強まる。人間の赤ん坊は、このようにして他者による保護を確かなものにしていく。

6ヶ月頃になると、養育者の顔を他と区別して理解するようになり、人見知りと呼ばれる現象が現れる。これにより養育者以外の他者を意識することで、人間関係の広がりへと発展させていく。

8ヶ月頃にはハイハイができるようになり、行動範囲を広げることで物理的世界との接触が増え、また外界から新たな刺激をうけることで認知がさらに発達する。

<p>アタッチメント</p>	<p>ボウルビー^{※3}は、生後12ヶ月頃までの時期に母子のアタッチメント^{※4}が成立するとした。乳児に正常な愛着関係が形成されないと、成長した後に情緒不安やコミュニケーション不全などを引き起こす可能性があるとは指摘している。</p> <p>彼は乳児の泣き声や笑顔などに対し、母親が自然に反応する生得的なシステムが関わっていると考え、これがアタッチメントの形成に関与すると考えた。^{※5}</p> <p>アタッチメントの形成に関する実験に、ハーロウ^{※6}によるアカゲザルの代理母実験がある。アカゲザルの子どもに、ミルクの出る針金製の代理母と、ミルクの出ない布製の代理母を与えたところ、子どもは布製の代理母と大半の時間を過ごした。</p> <p>この実験結果からわかることは、愛着の形成には餌の有無よりも、温もりや柔らかさといった身体感覚が重要な役割がある、ということである。</p> <p>もうひとつの実験は、エイズワース^{※7}の開発したストレインジ・シチュエーション法である。これは見知らぬ実験者に乳児を預けて母親が退室し、一定の時間が経過したところで戻るという方法である。分離時と再会時における乳児の反応は、回避型、安定型、アンビバレント型に分類できる。</p>
-----------------------	--

※3
(John Bowlby
:1907-1990)
イギリスの精神科医
※4
愛着のこと。

※5
アタッチメントは父親や
祖母など親密な養育者
との間にも成立する。

※6
(Harlow, H. :1959-)

※7
(Ainsworth, M. D. S.
:1993-)

回避型	見知らぬ場所に連れてこられた時も、親が退出した後も、また親が戻ってきたときも常に一人で遊び、親に対して愛着行動を示さないタイプ
安定型	見知らぬ場所でも親がいると安心して遊び、見知らぬ人が入ってきた後で親が退出すると不安を示すが、親が戻るとすぐに安心してまた遊び出すタイプ
アンビバレント型 (葛藤型)	親と一緒にいるときには安心して遊ぶが、親が退出するとすぐに不安や恐怖を示し、親が戻ってきたときには愛着行動だけでなく、敵意や攻撃を示すタイプ

安定型の反応は、子どもと親との間に基本的な信頼感があり、親が安全基地として機能しているため、子どもに積極的な探索活動が起こると考えられる。またアンビバレント型は、子どもが親に対し十分な信頼感を持てずにいることを示している。

この実験結果から分かることは、母子間に愛着関係と信頼感が形成されているときは、母親は子どもにとって安心できる安全基地となり、母親の存在があることにより見知らぬ状況においても情緒の安定が保たれ、探索行動を起こすことができるということである。逆に安全基地である親から引き離されると、子どもは不安と恐れを示すことになる。

また、乳幼児期に、何らかの事情により長期に渡って親から離されて、施設などに入所した場合に生じる言語発達の遅れや情緒不安定、依存性などの傾向を**ホスピタリズム（施設症）**という。

マターナルデプレーション	ポウルビィによって研究され、知られるようになった。これは子どもの成長時に必要な愛情ある接触が、何らかの理由で妨げられた場合、子どもの知的発達に遅れが生
--------------	---

	じたり、情緒表現の成熟に阻害が生まれたりする状況を指す。他にも社会性の不足や、さまざまな癖となって現れることも指摘されている。
生理的早産	<p>ポルトマン※8により命名された。人間の乳児は胎内で生育する期間がきわめて短く、他の動物と比べても早産である。とりわけ生後1年程度は、自力で移動することもできず、食事も外部より与えられないと摂取できない。</p> <p>本来、動物はこうした時期は胎内で成長を待つのにに対し、人間は出産後にその期間を過ごす。</p>
心理的誕生	<p>マラー※9は、子どもの誕生から3歳位までの間に、母親からの精神的な分離感覚が芽生え、「心理的誕生」に到達することを明らかにし、こうした心の発達を「分離-個体化過程」としてまとめた。</p>

※8
(Adolf Portmann
:1897~1982)

※9
(Margaret S. Mahler
: 1897~1985)

(2) 幼児期

5、6歳頃までを指す。基本的な運動能力や認知の発達に加え、社会性と生活習慣が確立しはじめる。言語は一語文から日常の会話ができるまでに発達する。これにより養育者による言語指示が有効となり、大人のそばを離れての活動が増えていく。たとえば「危ないからカッターにさわらないで」「お部屋で待っててね」といった言葉による指示が可能となる。

さらに人間関係も広がりを見せる。乳児期は子どもと大人との一対一の関係性が基本であったが、幼児期になると同年代の仲間との友達関係が強まる。喧嘩や言い争いなども増えていくが、他者と自分との言い分をすりあわせながら解決策や距離感を探るなど、人間関係について学んでいく重要な時期である。

この頃の特徴として、「私はわたし」という主張とともに自我が芽生えるが、思考は自己中心的※9である。これにより自分の主張や要求と、親のしつけとの間に葛藤が起り、第一次反抗期が表れる。また物質にも生命があると考える**アニミズム**や、事物を人間の表情的にとらえようとする**相貌的知覚**※10がみられる。

※9
自己中心性：ピアジェ

※10
「そうぼうてきちかく」

(3) 児童期^{※11}

12歳頃までを指す。客観的な知覚の発達や、行動能力の著しい発達がみられる。7、8歳頃から、具体的なものを使えば論理的な思考ができるようになる。そして11歳頃には抽象的な思考が芽生え始める。

活動は家族から友だち中心へと移行し、社会性にも発展がみられる。児童期の後半^{※12}には10名以上の集団で遊び、自分たちで決めたルールや集団の規範を重視するようになる。人間関係の特徴として、友人関係が固定化し、継続性が生まれる。この時期は同性同輩で仲良しグループをつくり、排他的なまとまりを強く持つため、**ギャングエイジ**とも呼ばれる。

その後、思春期の前半期までに、同じ興味や関心、クラブ活動などを通して関係ができる**チャム・グループ**^{※13}を形成する。

(4) 青年期^{※14}

個人差が大きい、20歳半ば頃までを指す。20歳くらいで脳の言語野^{※15}が完成するため、論理的な思考や、より複雑で抽象的な思考ができるようになる。身体的には性的に成熟する第二次性徴期に入るが、肉体と精神とのアンバランスが起りやすく、情緒的には敏感で不安定な時期である。

青年期の前期^{※16}までは、児童期の後半から現れた第二次反抗期が顕著となる。また、同年代の友人関係だけでなく、異年齢の友人との関係も生まれ、その仲間集団の影響が強まることで、**ピア・プレッシャー**^{※17}が非常に高まる時期でもある。親や教師などの大人からの指示よりも、仲間内での価値観に従う傾向が見られる。集団内でのルールや雰囲気から受ける影響力は大きくなり、友人の考え方、行動様式に自分を合わせようとする。これが良い方向に働くと、勉強やスポーツなどで切磋琢磨しあう関係が築けるが、万引きといった反社会的な行動であっても影響を受けやすくなる。(この時期の異年齢の仲間集団を**ピア・グループ**という。) よって教育活動においては、生徒間の人間関係について理解を深め、適切な援助に生かしていくことが大切である。

青年期の後半になると、社会的には家族から離れて社会に出ていく過渡期に当たり、親への依存と独立との間でゆれつつ、**心理的離乳**を果たそうとする。この社会的には自立していない不安定な状態を、**エリクソン**^{※18}はモラトリアムという概念で説明した。そしてこの時期の発達課題は、自己理解を深め自我を確立する自我同一性の獲得にあると述べた。

※11
学童期ともいう。

※12
10歳頃

※13
chum: 仲良し
ギャングエイジが多面的な行動面での一体性や凝集性があるのに対し、チャム・グループは性格的・内面的な一体感や凝集性を特徴としている。

※14
青年期前期を「思春期」と呼ぶことが多い。

※15
思考や記憶を司る部分

※16
17歳頃まで

※17
仲間からの圧力のこと。

※18
(Erik H. Erikson
:1902-1994)

ホール^{※19}はこの時期を身体的、精神的、社会的に「疾風怒濤」の時代と表現した。またシュブランガー^{※20}は青年期を、子どもの精神状態から大人の精神状態に生まれ変わるという意味で「第二の誕生」と表した。

※19
(G. Stanley Hall
:1844-1924)

※20
(Spranger, E. :1882-1963)

【青年期に見られる事象】

青年期には自我同一性を獲得し、親への依存と独立との葛藤を経て、心理的離乳を果たす。しかし成長していく環境によっては、順調に自立へのステップを進んでいく人ばかりではなく、自立が遅れてしまう者もでてくる。以下に健全な自立が果たせなくなっている代表的な事例を挙げる。

<p>青い鳥症候群</p>	<p>メーテルリンクの代表作『青い鳥』から名を取っている。登場人物の兄妹チルチルとミチルが、過去や未来に幸福の象徴の青い鳥を探すストーリーを現代青年の姿に重ね、自分の理想とする職業を探し求め、転職を続けてしまう事例を指す。</p>
<p>ピーターパン・シンドローム</p>	<p>楽園ネヴァーランドに妖精とともに住み、さまざまな冒険を繰り広げる永遠の少年ピーターパンのように、大人になることを拒否し、社会への積極的な参加をしようとしなないパーソナル障害をさす。</p>
<p>シンデレラ・コンプレックス</p>	<p>不遇にあるシンデレラが、外部から来る何らかのきっかけによって自分の人生を好転することを待ち続け、信じている様子から、男性への理想が高く、「いつかすてきな男性が現われる」ことを思い続け、心理的自立が阻害されている女性を重ねて名付けられた。</p>
<p>境界人 (マージナルマン)</p>	<p>ゲシュタルト心理学者のレヴィンは、どの集団にも明確に所属していない者や性質特性が異なる集団に複数所属している者を境界人と呼んだ。特に社会的にも精神的にも不安定な青年期にあたる段階では多く見られ、緊張が強く、情緒が安定しないなどの事例が見られる。</p>

(5) 成人期(壮年期)

60歳頃までを指す。独立して社会的な活動により生計を営む時期である。多くは生家とは別の家族を形成するが、生活形態は多様である。

(6) 老年期(老人期)

心理的、身体的機能の減退がみられる時期である。社会的にも、退職や配偶者との別離などの喪失を特徴とする。一方で、抽象的思考や自我の統合は成熟を持続していく。

3. 発達課題

(1) 発達の課題とは何か

発達課題とは、人間が健全な発達をとげるために各発達段階で克服すべき課題であり、次の発達段階へのスムーズな移行をうながすための特有の課題でもある。教育心理学者のハヴィガーストが最初に提唱し、その後エリクソンなど、さまざまな心理学者がそれぞれの発達課題を提言している。

発達のありようが世代で異なることを示したものに、**発達加速現象**がある。これは時代が進むにつれて、身体的発達が促進される現象のことで、身長・体重・胸囲などの量的側面の加速化^{※1}という成長加速現象と、初潮・精通などの性的成熟、乳歯・永久歯の初歯・生歯完了といった質的变化の早期化という成熟前傾現象に分かれる。

これらの要因としては、栄養状態の改善、生活様式の変化による影響、都市化に伴う種々の刺激による視床下部・自律神経系への影響や、婚姻圏の拡大による異型接合の効果などが挙げられている。

また、発達加速現象については、性的成熟や体格の向上に比して、精神的発達とのズレが生じる場合があり、児童期・青年期の課題の1つとなっている。

(2) ハヴィガーストの発達課題

ハヴィガースト^{※2}は発達段階を6つに区分し、個人が正常な発達をとげるために、発達の各段階で達成されることが期待される課題の重要性を主張した。

発達段階	発達課題
乳幼児期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 歩行の練習 ・ 固形食をとる学習 ・ 話すことの学習 ・ 排泄の学習 ・ 性差と性的慎みの学習

※1
現代の平均身長は昔より高い。

※2
(Robert J. Havighurst
:1900-1991)
アメリカの教育学者

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事物についての単純な概念形成 ・ 両親・兄弟、他人と自己を情緒的に結びつける ・ 正・不正を区別する など
児童期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日常の遊びに必要な身体的技能の学習 ・ 遊び仲間とうまくつきあうことの学習 ・ 男女の適切な社会的役割の学習 ・ 読み、書き、計算の基礎的能力の発達 ・ 日常生活に必要な概念形成 ・ 良心、道徳性、価値の尺度の形成 ・ 個人的独立の達成 など
青年期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 両性の友人との成熟した人間関係の形成 ・ 男女の社会的役割の達成 ・ 自身の身体的変化の受容と有効な活用 ・ 両親や他の大人からの情緒的独立の達成 ・ 経済的自立の目安を立てる ・ 職業の選択や準備 ・ 社会的に責任ある行動を求め、達成する ・ 行動の指針としての価値や論理の体系の学習 ・ 適切な科学的世界観と調和した良心的価値の確立 など
壮年期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 配偶者との生活を学ぶ ・ 子どもを育てること ・ 市民的責任を負うこと ・ 適した社会集団をみつけること など
中年期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大人としての市民的、社会的責任を達成すること ・ 一定の経済的生活水準を築き、維持すること ・ 中年期の生理的变化を受容し、適応すること ・ 老齡の両親に適応すること など
老年期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 肉体的な力と健康の衰退に適応すること ・ 引退と収入の減少に適応すること ・ 配偶者の死に適応すること ・ 社会的、市民的義務を引き受けること など

(3) エリクソンの心理社会的発達理論^{※3}

エリクソンはフロイトの発達理論を発展させ、発達における自我の役割を強調した。彼はライフサイクルという概念を用いて個人の一生を8つの段階に分類し、各段階に固有の課題を想定した。エリクソンはこの課題を心理社会的危機と表現し、人間が成長の発達でその課題を解決することにより、健全な人格^{※4}が形成されるとした。

※3
ライフサイクル論ともいう。

※4
パーソナリティ

乳児期 (～1歳程度)	基本 信頼感 vs 不信	この時期の課題は、環境と将来のできごとに対して信頼を持つことである。信頼できる養育者とのアタッチメントを形成し、お腹がすいた、オムツが濡れているなど、基本的な欲求を満たしてもらった経験が大切となる。この課題を克服できないと不信を抱くこととなる。
幼児期初期、 前期 (～3歳)	自律性 vs 恥・疑惑	この時期の課題は、自分で出来たという自己達成感や、満足感を持つことである。これにより自分の存在を大事だと思えるようになり、自信を持って行動することができる。 一方で課題を克服できない場合は、自己嫌悪や恥を抱えることとなる。
遊戯期 幼児期後期 (～6歳)	積極性 vs 罪悪感	この時期の課題は、自発的な行動をとる能力の獲得で、自分から能動的に働きかけるといふ経験が大切となる。課題を克服できない場合は、罪悪感や不満感を抱く。
学童期 児童期 (～12歳)	勤勉性 vs 劣等感	理解する力と学習能力の獲得が課題である。7、8歳頃より、具体的なものを使えば論理的な思考ができるようになる。そして11歳頃には抽象的で客観的な思考ができるようになるため、与えられた命題についてじっくり思考する機会が大切となる。課題を克服できないと劣等感が生じる。
青年期 思春期 (～20歳)	同一性 vs 同一性 拡散	課題は、自我の確立による自我同一性の獲得である。自己理解を深めつつ、特に異性との関わりや社会的自立の問題に対して、自己のイメージと現実とを一致させていく経験が大切となる。課題を克服できないと、自己のアイデンティティに対して混乱が生じる。

前成人期 成人前期 (～30歳)	親密性 vs 孤立	課題は、他者へ愛情を注ぐ能力を獲得することである。配偶者や子ども、また身近な人間との親密な関係性を形成することが大切となる。課題を克服できないと愛情関係形成不能に陥る。
成人期 成人後期 (～65歳)	生殖性 vs 停滞	課題は家族、社会、次世代への関心を形成することである。これが克服できないと、関心の方向性が自己のみに限られてしまう。
老年期	統合 vs 絶望	自己の人間性及び人生における達成感や満足感の獲得が課題である。これが克服できない場合は、不満感と死への絶望を抱くこととなる。

第3節 発達 of 諸理論

1. フロイト：心理学的発達理論

フロイトは幼少期の体験を重視しつつ、深層心理に蓄積された性的欲動^{※1}が向かう方向性に着目して発達段階を分類した。

彼は、心理的発達とはリビドーが組織的に秩序づけられ、体制化される過程だととらえ、各発達段階に応じて特定の身体的部位で快感・満足が得られることで、さまざまな心理的な特性が表れると考えた。

そしてある段階のリビドーが十分に満たされると、次の段階に発達できるが、満たされないと欲求不満状態となり、様々な不適応をもたらすとした。しかし後にこの理論は、汎性的欲的であるとして批判されることとなる。

またフロイトは、幼児期にみられるコンプレックスについて、男児が母親に対して性的な関心を示し、それにより父親に対して強い敵視と恐怖を生むと考えた。異性の親に対する愛情、同性の親への反発が特徴であるこのコンプレックスを、**エディプス・コンプレックス**^{※2}という。

口唇期 (～1歳頃)	口唇の領域に快感を得る。母親からの授乳を通して外界との交流が行われ、吸うことが活動の主体となる。
肛門期 (～3歳頃)	肛門の領域に快感を得る。この時期に食事や衣服の着脱などの基本的な生活習慣が身につくが、特に排泄のトイレット・トレーニングの経験は子どもの心理に大きな影響を及ぼし、環境への能動的姿勢が生まれる。
男根期 (～6歳頃)	男児の場合、ペニスが最大の快感をもたらす器官となる。また異性の親への関心が芽生え、同性の親を憎むようになる。しかし両親の禁止的側面に対して同一化を行うことで超自我が形成され、これにより性への関心が抑圧される。
潜伏期 (～12歳頃)	性的欲動が抑圧され、社会的規範の働く学習や社会的な活動にエネルギーが注がれる。
性器期 (思春期以降)	リビドーの発達の最終段階であり、性的活動が再開する。それまで部分的な快楽を得ていた部分欲動が、性器愛を中心とする性欲へと統合される。つまりリビドーの全人的な統合がはかられる。

※1
リビドーという。

※2
女児はエレクトラ・コンプレックスという。

2. ピアジェ：知能の発達段階説

ピアジェは発達を環境への適応過程であるとみなし、認知構造の変化に着目して知能の発達を4つの段階に分類した。彼は、人間が何かを理解したり行動したりするときは、その下敷きとなる前提的な枠組みが存在すると考えた。これを**シエマ**または**スキーマ**という。

例えば子どもが初めてゴールデンレトリバーを見ても、「ワンワンだ」と言えるのは、その子どもの内部には「犬」というものを認知する枠組みがあるからで、人間は、常にこの認識の枠組みを新たな環境に合わせて変化させることで、適応をはかっている。

ピアジェは、このシエマを変化させ適応していく過程を、「同化」「調節」「均衡化」という3つの言葉で説明した。

「同化」	外界を自己のシエマに取り入れること
「調節」	外界に合わせて自己のシエマを変化させる働き
「均衡化」	同化と調節のバランスをとり、認識の安定化をはかる

先ほどの例でいえば、レトリバーについての情報を、自己のもつ「犬」という認識枠組みに取り込んで理解する※1。しかし仮に豚にそっくりの犬を見て、すぐにはその種類を特定できない場合、自己のシエマを変化させることで、「豚にそっくりの生き物」を「犬」として理解する必要にせまられる。そして既存のシエマと、新しい外界の刺激とのバランスを上手くとりながら、自己の中に新しい「犬」の認識枠組みを形成し、定着させていく。

こうした発見と学習を、あらゆる対象や場面において繰り返しながら、人間は新たな環境への適応を図るのである。

感覚運動期 (～2歳)	言語が発達する以前の時期であり、感覚と運動との関係性を発見することが主となる。感覚運動期は対象永続性がかかるようになるまでの時期を指す。対象永続性とは、対象が目の前から隠されても、それは存在し続けるのだと理解できることをいう。※2
前操作期 (～7歳)	シンボル機能が発達し、目の前にない物体やイメージを思い浮かべることができるようになる。言語が習得でき、徐々に推理や思考が生じてくるが、まだ論理的思考

※1
シエマに取り込んで同化する。

※2
例えば「いないいない、ばあ」で母親の顔が隠れても、母親がいなくなったわけではないと理解できる。この時期は身体がしっかりとし、ハイハイから自立歩行ができるようになり、運動機能が発達する時期である。活動範囲が広がることから探索活動が盛んになる。

	<p>による概念の抽象化と一般化はできない。主観と客観が未分化であり、思考は自己中心的である。この時期をピアジェはさらに2つに分けている。</p> <p>象徴的思考段階は2～4歳までを指し、概念が形成される移行期にあたるが、まだ個と類の識別ができない。対して直観的思考段階は、4～7歳までを指し、個と類の識別が可能となる。しかし質量保存の概念はまだ未獲得であり、保存課題に失敗する。</p>
<p>具体的操作期 (～11歳)</p>	<p>具体的に理解できるものは、論理的に思考することができる。高さや重さで物を系列化したり分類したりすることはできるが、抽象的な概念になったり、具体的なものを離れたりとすると論理的思考が難しくなる。</p> <p>またこの時期のもうひとつの特徴として、形が変わっても、数や量は不変であるという保存概念を獲得する。例えば、同じ量の水を形の異なる容器に移し替えて「どちらが多いか」を尋ねても、量は変わらないことを指摘できる。※3</p> <div data-bbox="491 948 751 1166" style="text-align: center;"> </div> <p style="text-align: center;">液量の保存の実験</p>
<p>形式的操作期 (～15歳)</p>	<p>抽象的な事柄についても論理的思考が可能となる。また、命題的操作が可能となる時期である。ある命題が与えられると、その内容が現実にあるか否かにかかわらず、与えられた条件下で何が生じるかを考えることができるようになる。この段階で、人間の思考は完成した動きをすることができる。</p> <p>教育現場においては科学実験を取り入れて、仮説演繹的思考※4をするような学習が可能となる。</p>

※3
保存課題の成功という。保存概念の獲得ともいう。4、5歳の幼児(直観的思考段階)では、水面の高くなったコップCの方を量が多いと考える(中心化)。見かけに惑わされず論理的に認識できるのは7～8歳以降の時期(具体的操作期)である。

※4
「かせつえんえきてきしこう」。仮説に基づいて結論を導くような思考。

3. コールバーグ：道徳性発達理論

コールバーグ^{※1}は、人間が道徳的価値観を獲得していく学習過程について着目し、道徳性は認知能力と役割取得能力の向上と結びついて発達するという、道徳性発達理論を提唱した。例えば「10名を救うために1名を犠牲にできるか」といった道徳ジレンマに遭遇した際の選択に着目し、判断理由を分析することで道徳性の発達を3つの段階に分けた。

第一の前慣習的段階では、道徳観念は行動によってもたらされる結果^{※2}に基づく。第二の慣習的段階では、他人を喜ばせたいという思いや規則・法律に従うことが道徳観念の基準となる。そして第三の脱慣習的段階では、個人的な道徳原理に基づいた道徳観念を持つようになる。コールバーグはこの三つの段階をさらに細分化し、全部で6つの道徳性発達段階を提唱した。

※3

前慣習的段階	第一段階：罰と服従への志向	罰の回避と力への絶対的服従がそれだけで価値あるものとなり、罰せられるか褒められるかという行為の結果のみが、その行為の善悪を決定する。
	第二段階：道具主義的相対主義への志向	正しい行為は、自分自身または自己と他者相互の欲求や利益を満たすものとしてとらえられる。 具体的な物・行為の交換に際して、「公正」であることが問題とはなるが、それは単に物理的な相互の有用性という点のみを考えられてのことである。
慣習的段階	第三段階：対人的同調あるいは「よい子」への志向	善い行為とは他者を喜ばせたり助けたりするものであり、他者に善いと認められる行為となる。多数意見や「ふつうの」行為として常識的に型どりされたイメージに従うことが多い。行為はしばしばその動機によって判断され、そこで初めて「善意」が重要となる。
	第四段階：「法と秩序」の維持	正しい行為とは社会的権威や定められた規則を尊重しそれに従うこと、すでにある社会

※1
(L. Kohlberg:1927-1987)
アメリカの心理学者

※2
罰や報酬など。

※3
アイゼンバーグ
(N. Eisenberg)は、コール
バーグの影響下で、「向社会的道徳的判断（向社会的行動）」による発達論を提唱した。

	への志向	秩序を秩序そのものために維持することになる。
脱慣習的 段階	第五段階：社会 契約的遵法へ の志向	規則は固定的なものでも権威によって押し付けられるものでもなく、そもそも自分たちのためにある変更可能なものとして理解される。 社会にはさまざまな価値観や見解が存在することを認めたとうえで、社会契約的合意にしたがって行為するということが「正しい」ことである。
	第六段階：普遍的な倫理的 原理への志向	正しい行為とは、「良心」にのっとりた行為である。良心は、論理的包括性、または普遍性ある立場の互換性といった視点から構成される「倫理的原理」にしたがって判断する。 ここでは、この原理にのっとり、法を超えて行動することができる。

4. ヴィゴツキー：発達の最近接領域

ヴィゴツキー^{※1}は、人間の発達^{※2}における他者の介入^{※3}に着目した。彼は人間の概念的思考や論理的記憶はすべて言語によるものであると考え、言語をコミュニケーションの道具である外言と、思考の道具である内言とに分けた。そして幼児期にみられる独り言のようなおしゃべりが、思考の働きと出会うことで、その後に思考の道具としての内言が獲得されると唱えた。

またヴィゴツキーは子どもの知的水準を、自分で問題解決できる「今日の発達水準」と、自力では解決できない「明日の発達水準」とに分け、両者のズレを他者の援助があれば問題解決が可能な、発達の**最近接領域**であると述べた。

もし学習が、今現在の発達水準レベルにのみ行われるのであれば、教育は発達の後追いをし、既に獲得された心理的機能を訓練し強化するだけでよい。しかしそれでは新しい発見や創造的な知の構築は期待できない。

そこで彼は、大人の援助や子ども同士の協力によって問題解決にあたることで、今現在の発達水準を超えた、新たな知的発展に到達できると考え

※1
(L. S. Vygotsky
:1896-1934)

※2
特に幼児期を指す。

※3
主に教育のことを指す。

た。

こうして彼は、他者との相互作用が発達^{※4}における思考及び課題解決能力の発展の主導的役割を果たすことを指摘した。ヴィゴツキーの理論は現代の幼児教育や学習における個別指導の基礎理論となっている。

※4
特に幼少期の発達を指す。

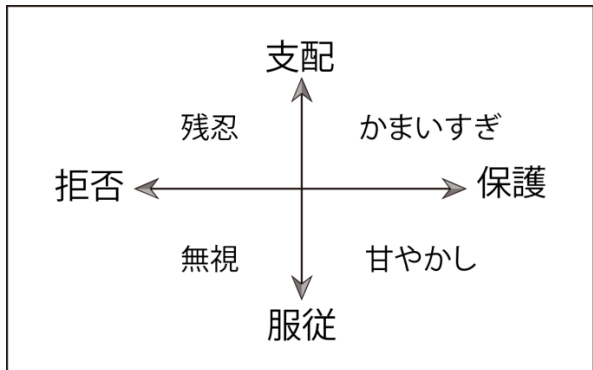
5. サイモンズの養育態度

サイモンズ^{※1}は、親の養育態度について類型化し、その後の子どもの性格について指摘した。それによると養育態度は大きく拒否型と保護型^{※2}に分かれる。

※1
(Symonds, P. S.1939)

※2
受容型ともいう。

拒否は嫌い遠ざけることで、保護は子どもを受け入れ愛することである。さらに支配型と服従型に分類をし、大きく4つのタイプを示している。なお支配とは子どもに対して常に厳格で、統制しようとすることで、服従とは子どもの要求に従いがちで子どもの自由にさせることである。



上記のような四つの養育態度のもとで育った子どもは、以下の表のような性格となると考えられている。

養育態度	性格
残忍型	逃避的 神経質 不安
かまいすぎ型	依存的 幼兒的
無視型	攻撃的
甘やかし型	反抗的 独立的

MEMO

重要キーワード 暗記 & checkシート

第2章 発達

■発達とはなにか

発達の定義	・発達 = 変化 ・発達 ≠ 進化
エリクソン	・ライフサイクル
ローレンツ	・初期学習 ・刻印付け (インプリンティング)
スキヤモン	・発達曲線 (神経系、リンパ系、一般系、生殖器系)
ピンカー	・モジュール (数、認識など) ・生得的
ピアジェ	・シエマ (枠組み) ・後天的 ・知能の構造
ワロン	・パーソナリティ全体

■発達の背景

孤立要因説	ゲゼル	・成熟優位説 ・双子に階段上がり ・レディネス
	ワトソン	・環境優位説
	ジェームス	・本能
	ピンカー	・認知モジュール
	チョムスキー	・言語生得説
輻輳説	シュテルン	・遺伝も環境も関係する ・IQ
相互作用説	ジェンセン	・環境閾値説 (各特性が必要とする環境と素質の関係)

■発達課題

乳幼児期	・歩行 ・固形食 ・会話 ・排泄 ・性差と性的慎み
児童期	・遊びに必要な身体的技能 ・遊び仲間とのつきあい ・個人的独立の達成 ・男女の適切な社会的役割 ・読み、書き、計算の基礎的能力
青年期	・両性の友人との成熟した人間関係 ・男女の社会的役割 ・自身の身体的変化の受容と有効活用 ・経済的自立 ・情緒的独立の達成
壮年期	・配偶者との生活 ・子どもを育てる ・市民的责任 ・適した社会集団
中年期	・市民的、社会的責任 ・経済的生活水準を築き、維持 ・中年期の生理的变化を受容、適応 ・老齡の両親への適応
老年期	・肉体的、健康の衰退への適応 ・引退と収入減少への適応 ・配偶者の死への適応 ・社会的、市民的義務の引き受け

■発達段階

乳児期 (0～2歳)	・反射 ・吸綴行動 ・クローイング ・喃語 ・社会性微笑 ・人見知り	
	アタッチメント	・愛着行動 ・ボウルビィが提唱 ・アタッチメント ・アカゲザルの実験 (ハーロウ) ・針金製と布製 ・愛情形成には温もり、安心
	ステレインジ・ シチュエーション	・エインズワースが提唱 ・回避型、安定型、葛藤型 ・見知らぬ実験者に乳児を預け、母親退出 ・安全基地
	マターナル デブリーション	・子どもの成長時、必要な愛情が不足した場合 →・知的発達の遅れ ・情緒表現の成熟不足
	生理的早産	・ポルトマンが提唱 ・子宮外胎児期
	心理的誕生	・マラーが提唱 ・分離-個体化過程
幼児期 (～5、6歳)	・言語による指示の有効性 ・友人関係の発生	
	自己中心性	・ピアジェが提唱 ・自分の考えが皆の考え
	相貌的知覚	・あらゆる物質を人命視する
	アニミズム	・あらゆる物質に生命がある
児童期 (～12歳)	・論理的思考 ・ギャングエイジ ・チャム・グループ	
青年期 (13歳～)	・複雑な思考 ・ピアグループ ・ピアプレッシャー ・第二次性徴期 ・第二次反抗期 ・第二の誕生	
	自我同一性	・エリクソンが提唱 ・心理的離乳
	心理的離乳	・親依存からの独立 ・モラトリアム
	青い鳥症候群	・理想の職業を探すため転職を続ける
	ピーターパン・ シンドローム	・大人になることを拒否 ・現実に対する自信の欠乏 ・孤独 ・父親への心理的コンプレックス
	シンデレラ・ コンプレックス	・外部からのきっかけを常に期待 ・男性への理想の高さ ・心理的自立の阻害
	境界人 (マージナルマン)	・どの集団にも不所属 ・異集団への複数所属 ・緊張が強く情緒不安定

■発達課題 (ハヴィガースト)

乳幼児期	・歩行 ・固形食 ・話す ・排泄 ・正、不正の区別
児童期	・遊びに必要な身体的技能 ・男女の適切な社会的役割の学習 ・読み、書き、計算 ・個人的独立 ・良心、道徳観
青年期	・両性の友人との人間関係の形成 ・男女の社会的役割の達成 ・両親からの情緒的独立 ・行動の指針としての価値、論理体系
壮年期	・配偶者との生活 ・子育て ・市民的責任を負う
中年期	・市民的、社会的責任の達成 ・一定の経済的水準の維持
老年期	・肉体的力、健康の衰退への適応 ・引退と収入減少への適応

■ライフサイクル論（エリクソン）

乳児期（～1歳）	基本信頼感 vs 不信
幼児期初期、前期（～3歳）	自律性 vs 恥、疑惑
遊戯期、幼児期後期（～6歳）	積極性 vs 罪悪感
学童期、児童期（～12歳）	勤勉性 vs 劣等感
青年期、思春期（～20歳）	同一性 vs 同一性拡散
前成人期、成人前期（～30歳）	親密性 vs 孤立
成人期、成人後期（～65歳）	生殖性 vs 停滞
老年期	統合 vs 絶望

■心理的発達理論（フロイト）

口唇期（～1歳頃）	・口唇領域に快感 ・母親からの授乳を通して外界との交流
肛門期（～3歳頃）	・肛門領域に快感 ・トイレット・トレーニング経験が影響
男根期（～6歳頃）	・異性の親への関心 ・同性の親を憎む
潜伏期（～12歳頃）	・性欲動の抑圧 ・社会的規範 ・社会的活動への注力
性器期（思春期以降）	・性的活動の再開 ・リビドーの全人的統合

■知能の発達段階説（ピアジェ）

同化	外界を自己のスキーマに取り入れること
調節	外界に合わせて自己のスキーマを変化させる働き
均衡化	同化と調節のバランスをとり、認識の安定化をはかる

感覚運動期（～2歳）	・感覚と運動との関係性 ・対象永続性 ・盛んな探索活動
前操作期（～7歳）	・目の前にない物体や事象の確認・言語習得 ・推理、思考 ・自己中心的思考 ・象徴的思考段階 ・直感的思考段階
具体的操作期（～11歳）	・保存概念の獲得
形式的操作期（～15歳）	・抽象的な事柄についての論理的思考 ・命題的操作 ・仮説演繹的思考

■道徳性発達理論（コールバーグ）

前慣習的段階	第一段階	罰と服従への志向
	第二段階	道具主義的相対主義への志向
慣習的段階	第三段階	対人的同調あるいは「よい子」への志向
	第四段階	「法と秩序」の維持への志向
脱慣習的段階	第五段階	社会契約的遵法への志向
	第六段階	普遍的な倫理的原理への志向

■最近接領域（ヴィゴツキー）

・今日の発達水準：自分で問題解決できる ・明日の発達水準：自力では解決できない → 自分の能力よりも少しだけ高いレベルを目指すことで成長できる
--

■養育態度(サイモンズ)

残忍型	逃避的 神経質 不安	かまいすぎ型	依存的 幼児的
無視型	攻撃的	甘やかし型	反抗的 独立的